

# サイパンをめぐる環境問題

(原案 国際交流学科 2年 時田亮)

現在、キリバスを始めとしたミクロネシアの島々での、地球温暖化の影響による海面上昇が懸念されているが、サイパンでもそれは感じられた。昨年サイパンを訪れたゼミ生と同じビーチにて、ほぼ同じ時間に撮った写真を比べても、ビーチは消滅しているように感じられる。ゼミ生が、バーベキューを行ったビーチは、潮が満ち始めていたとは言え2-3人が並んで歩ける幅はなかった。キリバスでは、50年後には島全体が海に水没し、消滅してしまうと言われているが、サイパンにも着実にその時が迫っているようだ。

サイパンの西海岸にあるビーチロード沿いには、5キロにわたるコンクリート製の立派な遊歩道が続いている。実はこれは特別強固に設計されており、分厚い舗装の下にはさらに地下2メートルくらいまで、珊瑚岩がワイヤーに包まれて敷き詰められているという。海水面が上昇してきて、海岸が削られても、この遊歩道で侵食を食い止められるように設計された、という。(注1) 一方2006年秋、マイクロビーチにあるコンクリート造りの遊歩道は、波に侵食されて、その傍のトイレもついに浸水してしまったそうだ。

サイパンの史跡、戦跡をたどるのが主要目的の研修の中でも、ゼミ生は常に環境問題の深刻さに直面せざるを得なかった。この報告書ではそうした問題について分析する。

## 農業問題

日本統治時代のサイパンは、松江春次による製糖業の起業の成功で、島中にサトウキビ畑が広がった。多くの日本人が入植し、コーヒー豆、さつまいも、タピオカなどの栽培に成功し、南洋一農業が豊かな島となった。しかし現在のサイパンには、農業産業は成り立っていない。理由の1つに、太平洋戦争時の米軍のじゅうたん空爆によって土壌が劣化したこと、さらにそれに続く島の植物生態系の意図的破壊がある。米軍は、島中に無数に散乱した死体や戦跡の処理に手を焼いたため、タンガンタンガンと呼ばれるマメ科の植物を、島中に空中散布した。バーベキューなどに使う炭にするしか使い道のないこの植物は、強靱な繁殖力を持ち、1ヶ月ほどで成長するので、あっという間に島全体を覆い尽くして、島の生態系を食いつくしてしまったのである。今回の研修で、スーサイド・クリフ、バンザイ・クリフを訪問する際、当時サトウキビ畑だったと

いう場所を通ったが、実際に見渡す限り、タンガンタンガンのジャングルであった。米  
国政府は戦後北マリアナ諸島を統治するにあたって、その戦略的位置からみた軍事的重  
要性には注目したが、日本統治時代のように島に農産物を興すことは考えていなかった。  
むしろ、日本企業が戦前のように島に戻ってこないようにするために、島の「農業価値」  
を潰してしまっただけらしい。(注2)

サイパンにおける農業の衰退は、島の自給自足率の低下を意味し、島民の生活に大  
きな影を投げかけている。現在島民が消費する野菜、果実はほとんど島の外から運ばれ  
てくる。ゼミ生がスーパーでにんにくを買おうとしたが、新鮮なものが見当たらずあき  
らめた。この原因を地元の人に聞いたところ、にんにくはブラジルかペルーあたりから  
はるばる輸入されてくるので どうしても品質が劣化する、とのことだった。スーパ  
ーマーケットで売られている野菜類ならたいていアメリカ本土からの輸入品らしい。  
それで野菜は非常に高価で、サラダも気楽に作れない。街の屋台や朝市などで売られて  
いる少量の野菜や果物は、島の産物らしい。しかし残念なことに島で採れる農産物には  
危険な農薬や化学肥料を使用している場合もあるとのこと、油断はできない。

食べて安全な野菜類を安価に入手できない、ということは、島民の食生活習慣の  
劣化をも意味する。つまり島民はあまり野菜を食べ(られ)ず、もっぱら肉類、甘い  
スナック菓子、アメリカン(高カロリー、高コレステロール)なファースト・フードに  
依存することになる。サイパンに農業を復活させることは非常に大切なことなのだ。

## 漁業とゴミ処理問題

サイパンの産業の1つに漁業がある。チャモロ人やカリフォルニア人達が主な従事  
者で、以前はサービス業と並ぶ、サイパンの主な産業の1つであった。しかし、漁獲量  
は年々下がる一方で、去年の漁獲量はわずか88万トンだそうだ。この原因として、水  
質汚染の傾向があり、その原因はゴミだという。

サイパンには、ゴミの分別も、収集も、ゴミ焼却施設もなく、各家庭、レストラン、  
ビジネスが出すゴミは、収集場に捨てられる。その収集場というのが、海岸の近く  
にあることが多い。ゴミを埋める訳でも、燃やす訳でもなく、ただ積み重ねるだけだ。  
生ゴミにはハエが繁殖するし、そのゴミが海に流れ出てしまう可能性もある。島には、  
生活ゴミだけでなくPCB問題を含む産業廃棄物処理問題もあり、野焼きを行なった場合、  
ダイオキシン対策などをまだ行なっておらず、問題は山積みらしい。(注3)

私たちの泊まったホテル前の海は綺麗であったが、マイクロビーチ界隈の海は、  
ビーチに隣接したゴミ捨て場から染み出る汚水のために、透明度が下がってきて、遊泳  
禁止に指定されたところもあるという。汚れは、2キロ沖合いに浮かぶ、水の透明度で  
有名なマニガハ島にも達したとそうだ。水質汚染は、漁業への悪影響だけでなく、  
ビーチやマリンスポーツを売りにする観光産業にも影を落とすので、こちらも早期解決

が必要である。

減る一方の漁獲量への対応として、北マリアナ諸島政府は、2005年半ばに、魚を捕獲する際、刺し網、引き網、まき網などの使用を禁止し、海洋資源の保護に出た。幸い結果は良好で、サイパン海域では魚類が増加しているとのことだ。これをきっかけにサイパンでは、漁業を主要産業にし、マグロ、エビなどを輸出しようという試みすら始まっているという。(注4) しかし肝心のゴミ問題の方は、解決の糸口が見つかったようには思われない。

## 環境保護活動

私達ゼミ生は昨年の研修と同様、滞在したアクエリアス・ビーチホテル前からシュガー・ドックあたりまでのビーチの清掃をした。毎年私たちの研修のお世話をしてくれたパシフィック・イーグル社社長の松本ウィリーさん、綾子さん夫婦が参画している Beautify CNMI (北マリアナ諸島を美しくしよう!) という草の根ボランティア運動は、ビーチ清掃、サイパンのシンボルである火焰樹(フレイム・ツリー)の植樹活動、史跡の保存清掃活動などを広く手がけている。今年もその活動の一環に私たちゼミ生を誘ってくださったのだ。昨年同様ゼミ生全員軍手をはめて、砂からゴミを拾い集めていく。地元民か観光客がビーチ・バーベキューで使用したであろう発泡スチロール製の皿の切れ端、プラスチックのフォーク、ストロー、缶ジュースやビールのタブ、そして大量のタバコの吸殻、あげくには使用済みの紙オムツなどが見つかる。

今回ビーチ清掃後に、環境問題に関するフォーラムを企画し、ゼミ生に講義してくれたのが、チャモロ人の血をひくアンジェロ・ビラゴメス (Angelo Villagomez) 氏である。彼はサイパンに生まれ育ち、アメリカ本土の大学で海洋生物学を学び、卒業後サイパンに戻ってきて環境保全運動に広く関与している。

彼が現在最も力を入れているのが、サイパンの属するマリアナ諸島の最北端の三つの島々を含む30万平方キロメートルを、マリアナ海溝国定海洋ナショナル・モニュメント (Mariana Trench Marine National Monument—海底記念物)として、アメリカ連邦政府に認めてもらおうという運動である。そもそもアメリカの非営利文化学術団体であるピュー慈善信託 (The Pew Charitable Trusts) が、この計画に支援を寄せ、そのサイパンにおける広報担当として、アンジェロ氏が活躍中という訳である。

マリアナ諸島の最北端、ウラカス島、マウグ島、アスンション島(いずれも、無人の火山島)とその近辺の海域は、野鳥や海洋生物、天然資源の宝庫で、この地域がアメリカの保護地域として認められれば、アメリカ連邦政府から補助金が支給され、質の高い環境保護活動を展開する事が出来、なおかつ、地元の政府や民間人による経済活動を制限出来る。それで、この地域での石油、天然ガス、鉱物資源の採掘、漁業活動に利権をもつ諸団体は 経済的マイナス効果を考え、モニュメント反対活動を展開し、北マ

リアナ諸島にはこの件をめぐり激しい論争が続いた。しかし、2009年1月6日、ブッシュ大統領は、同区域を、新たな海洋ナショナルモニュメント（海の国立記念物）に指定することを決定し、宣言式がホワイト・ハウスで行なわれた。環境保全に消極的だった同大統領が、任期最後で「青い地球遺産」を残すことになった。（注5）

いずれにしても このようにサイパンは、数々の一刻を争う環境問題に直面しており、それら全ては島民の生活に直結するものである。日本人として考えなければならないことは、そもそも水質汚濁とその原因のゴミ問題は、私達のような島を訪れる観光客が深化させている、ということだ。地球温暖化の問題も含めて、私達先進国の人間にとって、サイパンの環境問題は他人ごとでなく責任感を持って取り組んでいかねばならない。日本人が放棄したまま半世紀以上がたってしまった島の農業のこともある。さらにマリアナ海溝国立海洋ナショナル・モニュメント運動を考えると、サイパンと日本は海でつながっている、と実感できる。

注1： 中島洋一「地球温暖化と北マリアナ」『やしの実大学』

[http://www.yashinomi.to/micronesia/hafadai\\_0112.html](http://www.yashinomi.to/micronesia/hafadai_0112.html)

注2： 松島泰勝『ミクロネシア：小さな島々の自立への挑戦』（早稲田大学出版、2007）、107ページ。

注3： KFC Triathlon Club ブログ『北マリアナ諸島（ロタ&テニアン&サイパン）ローカル情報満載ファイル』「#9 サイパン島の憂鬱」より。

[http://www.kfctriathlon.jp/html/island\\_local\\_001.html](http://www.kfctriathlon.jp/html/island_local_001.html)

なお、ロタ島のゴミ集配所の写真は、永井俊哉「北マリアナ連邦」（ブログ『連山』）にて参照できる。 <http://www.teamrenzan.com/archives/writer/nagai/cnmi.html>

注4： Global Ocean Divers 『グローバル・オーシャン・ブログ』2008年12月5日 <http://blog.godivers.net/?cid=42024> ; 2008年12月26日 <http://blog.godivers.net/?eid=806696> を参照。

注5： The Pew Environmental Group が作成した、マリアナ海溝国立海洋ナショナル・モニュメントが関与する生態系の影響、経済的効果などに関する研究書 Global Ocean Legacy (PEW Environmental Group) “The Deepest Ocean on Earth: A Scientific Case for Establishing the Mariana Trench Marine National Monument” (August 2008) は、以下の URL で閲覧できる。

<http://www.globaloceanlegacy.org/newsroom/resources.html>

2009年1月の「ナショナル・モニュメント化決定」のニュースは以下を閲覧のこと。

<http://www.globaloceanlegacy.org/>



1. 2007年、オブジャン・ビーチにて。



2. 2008年、ほぼ同時刻、同地点にて。



3. ビーチが消えていく。



4. 戦前のサトウキビ畑

\* 北マリアナ博物館の展示写真より



5. 現在サイパン島で栽培される野菜。



6. アンジェロ・ビラゴメス氏に マリアナ海溝ナショナル・モニュメントの話しを聞く。